

# AQUA

ここは富水 すどう美術館の新しい活動の場  
こんなと水が湧くようにアートも湧めども尽きない希望が湧いてくる  
水はわたしたちになくてはならないもの「AQUA」が誕生する

2015年9月発行 43号 すどう美術館  
〒250-0853 神奈川県小田原市堀之内 373  
TEL.0465-36-0740 FAX.0465-36-0739  
info@sudoh-art.com  
http://www.sudoh-art.com

## 展覧会を終えて

田沼利規

ただいま、と言える美術館ができた。2週間の展示を終えて搬出の車を運転しながらの帰途、そんな言葉が浮かんだ。そう思わせてくれる館長夫妻の人柄については、既に他の方々がたくさん書かれていますので私は控えておくことにする。

今回の展覧会は自ら「20代の回顧展」と銘打って、大学の卒業制作まで引っ張り出し、自身の歩みを一旦俯瞰する試みであった。通常、作家は新作を発表することが一番大切だし、展示スペースの都合もあってこのような形の展覧会を開く機会は稀だと思う。すべての作家がそうであるように私自身もまた、その時々で自分を全力で作品に宿してきたつもりである。昔の作品を前にすると、辛かった時期や苦い経験を思い出すことも多々あり、過去の日記を読み返すようで気恥ずかしい。また、私の作品は白黒のものと色彩のものがあるのと、同じ空間にそれらを並べるとパッと見、作者が別人の印象を与えてしまうことが多い。幸い、すどう美術館は展示室が3つに分かれているので、部屋ごとに小さなテーマを設けての展示を考えた。しかし、どの作

品も根底に流れるものは等しく、私の叙情性である。あるお客さんから、「どの作品にも生命が流れていますね」と言われた時は、決して声高ではない自分の絵も、確かに観る人に語りかけていたのだと実感することができた。

期間中は夏休みだったこともあり、地元の中学生在が多く訪れた。美術館レポートという宿題のためなのだが、インタビューを受けたり、自作の模写をされたりと、身体の内側がくすぐられるような変な感覚であった。少し驚いたことは、一人で訪ねてくる中学生がほとんど居なかったことだ。友達や家族連れが大半で、母親が代わりに宿題をしているように見受けられる場面もあった。口煩い感じもするが、作品を鑑賞することは自分自身と真正面から向かい合うことでもある。過度にSNSが発達している現代だからこそ、鑑賞を通してゆっくり個と向き合ってもらいたいという思いが生まれた。

暖かな人の心を支える世界一小さな美術館、すどう美術館。きっと私が次に訪ねるときも、入り口の引き戸を開けていただいと入れば、館長夫妻はお帰りなさいと迎えてくれるのだろう。

## すどう美術館の最近の活動

すどう美術館館長 須藤一郎  
異常に暑かった今年の夏。すどう美術館はそれに負けず見応えのある展覧会が続けられた。7月末から2週間行つた田中鉄人展、この7月からは「田中鉄人展」の期待された。田中鉄人は昨年の「若き画家からのメッセージ展」の受賞者です。それほどの大きな一つ一つの支持を受けて、一筆一筆の力強い筆で描かれてきた。田中鉄人は、この夏、すどう美術館で「田中鉄人展」を開催する予定です。田中鉄人は、この夏、すどう美術館で「田中鉄人展」を開催する予定です。田中鉄人は、この夏、すどう美術館で「田中鉄人展」を開催する予定です。

ただいま、と言える美術館ができた。2週間の展示を終えて搬出の車を運転しながらの帰途、そんな言葉が浮かんだ。そう思わせてくれる館長夫妻の人柄については、既に他の方々がたくさん書かれていますので私は控えておくことにする。

### 点描

### こんな話でよかったら (30)

仙仁司

小田原の街に招かれたアーティスト、わたしの仕事は仕立て屋さん“優しい心”を創ります。どんなに痛んだ心でもすぐに戻してあげましょう。

せつせと“優しい心”を創っている最中の仕事振り程楽しいものはない。目付き、顔つき、筆を持つ手の繊細な動き、立ったり、掛けたり、屈んだり、描きかけの絵の前、使い古した愛用の画材と匂い、短い時間のなかで小田原の街を納めた控え帳やスナップ。アーティストの息遣い。

これまで何度か入った家だけど、今日は横目の好奇心、ソーツとドア開けて驚いた。できたての“優しい心”を手にしたアーティスト微笑みながら寄ってくる。心は話す、よく話す、いろんな人に話す仕事私の役目だと口上言ってまた話す、本当に楽しい長話、ようやく“優しい心”と出会えたこの話、誰にも教えず仕舞おこな、いやいや友達皆に話さかな。あなだが、今、一歩を踏み入ったところは“優しい心”の創造界、誰もが欲しくなりそうな特別な上等なものを産み出すところ、何でもあるよと聞いていた大きなデパートの中に入り隅から隅までも、上等なお洋服のポケットの中までも徒勞に終わった探し物。アーティスト・イン・レジデンスはとても楽しい出会いを創る。アーティストはそれぞれ不思議な世界を持っていて心の中に住まわせる。人と社会を刺激して終りのない多様化を見つけ出す。

もう一度、アーティスト・イン・レジデンスは人々の心を膨らまし街の心を創り出す。アートには不思議な力があるものだ。わかった〜。

### 白いノート 21

心と身体 半年ほど前から全体に行き始めた。からだ全体のバランスが整う感覚は心身共にすつきりとして気持ちがいい。静かな音楽とアロマオイルの香りに包まれながら、ふと気がつく。目の前の壁が真っ白で、少しさみしい気がする。ここに何気なく絵があつたら、とつい思ってしまった。病院の廊下やロビーに絵が飾られていることもありますが、その数はまだ少ない。アートが医療の分野に生かされている例として、ステーションでは病院建設予算の一定比率をアートに使うように法律で定められており、単に壁を飾るだけでなく、治療を受ける人の気持ちを考慮してアートを配置し、活用している病院の例子が紹介されていた。日本でも医療とアートの関わりに着目はされてはいるが、まだそこまでの実例は少ないのが現状ではないだろうか。痛みや不安をかかえる場所でもアートが果たせる役割と、その可能性をもっと広げていくことができないか、考えてみたいと思つた。高橋玉恵



## すどう美術館と私

私は新聞の配達をしているが、取っていただきたいと皆さんにお願いもしている。

私が新聞をお願いする為にすどう美術館を訪ねたのは何年前だったか。もう6、7年前になるだろうか。爾来、遠慮もなく客の居ない時を見計らって美術館にお邪魔している。私には絵を観るのが好きであり、これまでいろいろな人のたくさん作品を観せていただいていた。お邪魔した折は絵のこと、勿論、昔の懐かしい映画のことも話したりする。そして昨今の世相を館長と二人で憤ることもある。だから、つつい長居をしてしまう。辞する時、また迷惑をかけてしまった、と反省すること度々である。

何故か美術館に行くとお癒される。作品に接していることも勿論あるだろうが、須藤館長の人間性にあるのだろう。だから、つつい長居をしてしまう。須藤館長は話している時も何時どこで会っても穏やかで変わることがない。私は館長は大

石田郁夫

人(たいじん)だと思っている。穏やかでいるということは、出来そうではなかなか出来ないことである。徳をそなえている人でなければ出来るものではない。私などは、温厚そうに見えるらしいが、気が短くて、とても人の好き嫌いが激しい。館長を見習いたいと思うのだが、とても無理である。

性根の悪い人間は絶対に相手にしない。新聞の部数を減らしてでもそのような人間とは関わりたくないのである。だから今読んで頂いている客は皆んない人達ばかりである。絵も同じである。上手下手を言っているのではないが、品格のない絵は観たくないのである。須藤館長が選んだ絵には品格がただよっている。だから私は、客の居ない時を見計らってお邪魔をする。

小田原の富水にこんなところがあるのは嬉しい。この隠れ家のような場所がいつまでも続いて欲しいので館長の健康を願うばかりである。

### 展覧会 info

三次元の蟻は垣根を超える vol.4  
9月29日(火)～10月11日(日) 月曜休館  
11:00～18:00 (最終日～16:00)

「のびゆく予感」を共通のテーマに、寄木細工や木工芸、漆器、鋳物などの小田原で発展してきた工芸と現代アートの世界とのコラボレーション展を行います。

丸田千恵展 SIDE EFFECTS  
10月20日(火)～11月1日(日) 月曜休館  
11:00～18:00 (最終日～17:00)

#### 作家の言葉

「若き画家たちからのメッセージ展で、初めてすどう美術館にて展示させて頂き1年が経つ。こちらで初個展をさせて頂くことになり、とても光栄に思う。普段私は、人間の「行動」や、その人間を取り巻く「環境」に関心がある。今、錯綜する世界の中で生き、戸惑いを感じる事もある。SIDE EFFECTS展は、そのような二次的に起こってきた物事、1つ1つにスポットを当てた展示だ。是非沢山の方々に見て頂きたい。

### 続々 世界一小さい美術館ものがたり

「一寸先は闇」ということわざがある。「すこしでも先のことはなにが起るかわからない」という意味である。東日本大震災から始まり、西日本を中心とする大雨災害、広島から続いている箱根大涌谷や阿蘇の噴火活動など思ってもみない天変地異が次々起こっている。身近なことでも親族や親しい友人あるいはその関係者の急な死や重篤な病気など、予想をしていないことが起る。全てが他人事ではなく自分にもいつ降りかかってくるのかわからない。昨年、ほとんと予兆らしいものがなかった。突然妻が意識を失って倒れた。病しめたのもそうである。大まかに一寸先は闇と考えるべきなのだろうか。一寸先は闇と考えるべきなのだろうか。一寸先は闇と考えるべきなのだろうか。一寸先は闇と考えるべきなのだろうか。

が、具体美術を代表する作家の一人に元永定正さんがいる。生前、損保ジャパンの美術大賞を受賞した記念展を新宿の東郷青児美術館に見に行き、そのおらかな画風に強く惹かれたことを覚えていた。京都在住の作家、下千映子さんは元永さんの愛弟子であったが、三元永先生はいつも「一寸先は光」と言っていましたと教えてくれた。そう言っていて、まわりの作家たちを励まし、また、自分でもそう思う。頑張らされたのである。なるほど少し楽観的に聞かせるかもしれないが、闇ではなく光と捉えた方が明るい気持ちになるのではないかと。実際、暗いことばかりではなく、誰にでも必ずいいことがやってくるのである。私の妻が病から奇跡の生還をした。まだ全体的には時間を要するものであるが、おかげで、普通の会話ができるようになった。このことを私は「一寸先は光」と考

須藤一郎

### 「西湘地区アーティスト・インレジデンス」協賛のお願い

本年11月、国内外からアーティストを招待し芸術支援を行う第3回「西湘地区アーティストインレジデンス」にご協賛いただければ幸いです。資金面以外でのご協力もよろしく申し上げます。(実行委員会事務局 すどう美術館)

- ・個人協賛金 一口 5,000円(5,000円以下の小額でもお受けします)
- ・企業団体協賛金 一口 50,000円

※ご協力いただきました企業団体様等には、ご希望によりレジデンスで制作されます作品を寄贈いたします。

また、本プロジェクトPRのためのポスター、チラシ等の印刷物にお名前を記載させていただきます。

(振込口座)

みずほ銀行 小田原支店 普通口座 2898291  
口座名義 西湘地区アーティストインレジデンス



今回の病気で退院後訪問リハビリを受けている。おかげで身体の機能は大分回復してきた。毎日目標を決め、からだを動かす、自分自身で○△×の評価をする。○が多いと先生が褒めてくれる。最近「生活不活発病」という言葉を耳にする。高齢者に多く問題になっているようだ。年寄りの引きこもりなんて誰も心配はしてくれない。だから私は逆に「生活活発病」になつて、これから前向きに過ごして行きたいと思う。

須藤紀子

一寸先は光

編集後記